

日清戦争報道画と血の表現

— 木村浩吉の黄海海戦記録を中心に —

齋藤 希

はじめに

明治二十七年（一八九四）年九月十七日、黄海北部の鴨緑江口附近にて、帝国海軍の聯合艦隊と清国海軍の北洋艦隊の間で戦闘が行われた。日清戦争の黄海海戦である。両艦隊の激しい砲撃戦は真昼から夕方にかけて続き、結果、聯合艦隊が北洋艦隊の軍艦三隻を沈没させて勝利した。しかし、もとよりの戦力差から、勝者である聯合艦隊も甚だしい損害を被っており、本隊旗艦の松島をはじめとする数隻が敵艦の砲撃によって大破し、多数の死傷者を抱えたまま戦闘不能に陥った。この世界史上初となる汽走艦同士の本格的な海戦において、不沈の装甲艦隊として名高い北洋艦隊を破ったという報せは日本国内を大いに盛り上げた。聯合艦隊の勇姿は競って錦絵に描かれ、松島の惨状も忠勇美談の物語として民衆の間に広まっていった⁽¹⁾。日清戦争は近代日本が体験する初めての対外戦争であり、戦況に対する国民の関心は高く、文明開化によって人気が低迷していた錦絵も日清戦争を画題にすることで嘗ての盛況を取り戻せたという。

本稿は、木村浩吉の『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』を素材とし、日清戦争を報道する画に描かれた戦場のイメージを明らかにするものである。松島で水雷長を務めていた木村は、講和条約締結の翌年、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』と題する一冊の本を刊行した。この本は木村の実体験を文章と画に起こしたもので、松島が戦闘不能に陥るまでの様子を克明に表している。当時の人々は錦絵や木版画帖等、報道を兼ねて公に刊行された戦争画（以下、戦争報道画とする）から戦場のイメージを得ており、民衆にとって身近な存在である錦絵は事実と物語の曖昧な境界を描き出すことで人々を楽しませた。そのため、そこに描かれた戦闘場面は必ずしも近代戦争の実像を表しているわけではない。合戦調の劇的な演出が施された画もあり、勝報が一種の娯楽になっていたとわかる。それに対し、木村の画は戦闘の様子を誇張することなく描いている。注目すべきは、命中弾によって四散した死傷者の姿も描写していることである。木

村は、自身が目の当たりにした光景を記録するために、残酷さを伏せることなく画にした。戦争画には死と血に対する表現の問題が常に付き纏う。特に、自国の兵士の死に様となると、その取り扱いには慎重さが求められる。日清戦争の画においても、直接的な血の表現は避けられている傾向にあり、一部に残酷描写が見受けられることもあるが、木村の画のような生々しさはない。他の戦争報道画にない血の表現をもって、戦場の実際を伝えようとしたのである。

日清戦争を通して形成された国民意識については原田敬一の研究があり、当時の錦絵の中に武士イデオロギーが見受けられる点が指摘されている⁽²⁾。日清戦争に従軍した新聞記者、画工、写真師に関しては大谷正の論文も詳しい⁽³⁾。日本の戦争美術の研究としては、丹尾安典や河田明久が日清戦争の画も取り上げている⁽⁴⁾。また、日清戦争期の錦絵は報道メディアとしての観点から論じられることが多いが、市村茉莉の論文では錦絵を戦地別に分け、その描写表現の推移を考察することで、画面が生み出す戦場のイメージにアプローチしている⁽⁵⁾。ただ、戦争報道画に関する先行研究は数あるものの、日清戦争の表象研究として『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』を取り上げたものは管見の限り見当たらない。

本稿では、第一章にて『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』の概要と当時の作品評価を紹介する。第二章では挿絵の詳細を見ていく。さらに、同時代の他者作品も確認し、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』の特長を明らかにする。その見解をもって、明治期の戦争報道画を考察する足掛りとしたい。

一、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』について

(一) 概要

『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』は、明治二十九（一八九六）年二月十六日に内田老鶴圃から刊行された。本の大きさは縦が三十三・〇センチメートル、横が二十四・五センチメートルあり、挿絵の木版画は全て見開き二面で刷られている。本の構成は、中表紙、題辞、緒言、本文、跋文、刊記となっており、本文中の挿絵は全部で十八枚ある。海戦前の画が四枚、海戦の画が九枚（その内、損害状況を表した画は六枚）、海戦後の画が五枚という配分である（資料¹）。

著者の木村浩吉は、文久元（一八六二）年七月二十三日、幕臣・木村善毅（芥舟）の二男として江戸に生まれた。明治七（一八七四）年、海軍兵学寮の予科生とな

り、明治十五年、海軍兵学校（九期）を卒業している。また、千代田艦回航委員に選ばれてイギリスに赴いたこともある。明治二十七年の日清戦争では旗艦・松島の水雷長を務め、その勲功から二階級上がって大尉から中佐に昇進した。戦後は軍令部出仕を経た後、海軍大学選科学生となり、そのまま同校の教官も務めている。しばらく陸上での勤務が続いたが、明治三十七年の日露戦争では日光丸の艦長として出征した。その後も海軍水雷学校の校長等を歴任し、大正十一（一九二二）年に退役、昭和十五（一九四〇）年一月十四日に没している。最終階級は海軍少将（明治四十二年進級）、位階は従四位勲三等功四級であった。ちなみに、実弟の木村駿吉は艦船用無線電信機を開発し、日本海海戦の勝利に大きく貢献した人物である⁽⁶⁾。

明治二十八年十月十二日、木村は黄海海戦に従軍した記憶を文章と画に仕上げ、個人の書画帖に纏めた⁽⁷⁾。この書画帖は絹製の折本で、木村の文章と画の他に、版本の題辞や跋文に使われた書画、木村宛の書簡、版權登録証が収められている⁽⁸⁾。木村は、書画帖にあるそれらを編集し、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』と題して公に刊行した⁽⁹⁾。刊行に至るまでの経緯は版本の緒言で述べられている。

余初メ此冊子ヲ世ニ公ニスルノ意ナシ唯記憶スヘキ海戦ニ於テ余ノ當時親ラ見聞セル事實ヲ書畫帖ニ上セ以テ家ニ傳ヘントセシニ友人ノ切ニ印刷ニ付センコトヲ勸ムルモノアリ固ヨリ其勸ニ應スヘキ價ナキヲ信スレトモ現今海軍ノ思想未タ普及セサル時ニ屬スレハ戦後ノ好機ニ投シ童幼ヲシテ海軍思想ヲ啓發セシムルヲ緊要トシ特ニ畫圖ノ數ヲ増加シ理解ニ易ク記憶ニ便ナラシメ遂ニ其筋ノ認可ヲ得テ出版スル事トセリ若シ此小冊子ニシテ幸ニ幾分ノ世益ヲ爲スコトヲ得ハ翅ニ著者ノ大ニ喜フ所ノミナラス徳惠セシ友人モ亦満足スヘシト信ス

木村は初め、家に伝える目的で書画帖を纏めており、公にする予定はなかったという。しかし、その文章に続く「友人ノ切ニ印刷ニ付センコトヲ勸ムルモノアリ」という言葉は常套句なので、実際に当初から刊行の意思がなかったのかどうかは定かでない。いずれにせよ、木村は「戦後ノ好機」に「童幼ヲシテ海軍思想ヲ啓發」するため『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』の刊行を決め

た。木村のいう「海軍思想」とは制海権の確保を要とする国防戦略のことである。では、木村が「戦後ノ好機」と判断した明治二十九年はどのような状況にあったのだろうか。当時の世情を知るには、日清戦争の終結までやや遡る必要がある。

日清講和条約（下関条約）が調印されたのは、明治二十八年四月十七日のことだった。清国は朝鮮の独立を認め（干渉権の放棄）、日本に遼東半島、台湾、澎湖列島を割譲し、賠償金二億テールを支払うこと等を承認した。しかし、ロシア、ドイツ、フランスの三国から干渉を受け、同年五月四日、日本は遼東半島の全面放棄を決定する。十三日、日清講和条約とその批准・公布文が十日付で『官報』に発表された。この日、日清戦争は講和となったが、まだ大本営は解散していない⁽¹⁰⁾。確実に台湾を受領するため、軍事力による占領を選んだためである。遼東半島の還付が発表されると、日本国内は責任論で燃え上がり、報道媒体を中心に「臥薪嘗胆」のスローガンが広まっていった。干渉の責任は外交の失敗にあるとして追及する者もいたが、結果的に国民には国力の問題として捉えられた⁽¹¹⁾。そして、干渉を行った三国の内のロシアが日本の仮想敵国として明確になる。

こうした世情にあつて、木村は『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』を刊行したのだが、その際、「理解ニ易ク記憶ニ便ナラシメ」るため「畫圖ノ數ヲ増加シ」たとある。「記憶ニ便ナラシメ」とは、黄海海戦からすでに一年半ほど経っていることを考慮し、人々に海戦の内容を思い出させるという意味だと思われる。挿絵を多くしたのは、文章に書かれたことを解りやすく伝えるためだけでなく、当時のことを振り返りながら改めて海戦及び海軍について考えてもらいたかったからであろう。

緒言の後には「艦内ノ慘状ヲ示ス繪畫ハ漫然店頭ニ掲ケラレシコトヲ恐レ版權所有ノ權利ヲ以テ之ヲ禁ス幸ニ諒セラルヘシ」という困い書きがある。木村は、作中の残酷描写のみに注目が集まり、その挿絵が一人歩きすることを恐れた。もし、挿絵だけが出回れば、その画は様々な解釈によって受け止められるだろう。挿絵には簡単な説明文が添えられているが、描かれている場面の解説であり、木村の持論を展開するものではない。当時、明確な線引きはなかったものの、公共良俗を乱すと判断されたものには規制が入った。この困い書きが守られていたかどうかはわからないが、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』も

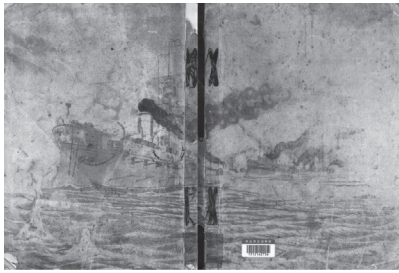


図1 表紙・裏表紙(奈良県立図書館蔵)



図2 川村清雄「黄海海戦」
(木村浩吉資料、横浜開港資料館蔵)

世に出て一年後には発禁処分となっている⁽¹²⁾。

なお、『近代戦争文学事典』によると『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』には異版が確認されている⁽¹³⁾。同じ刊記でありながら挿絵の枚数が異なっており、現在のところ本稿に使用した全十八図の版本以外に、全七図と全十六図のものが存在するようだ。自身で実物を確かめることができたのは、奈良県立図書館が所蔵する全十八図の版本だけだが、書画帖に収められている原画の枚数から判断しても、全十八図の版本より挿絵の掲載数が上回るものは存在しないだろう。なお、異版でも松島の損害状況を表した六枚は欠けておらず⁽¹⁴⁾、この点からも挿絵の中で重要視されていた画であることがわかる。また、奈良県立図書館は全十八図の版本を二冊所蔵しており、挿絵の枚数は同じだが、巻末に新聞の批評が掲載されているか否かの違いがあった。刊記はそのままだが、掲載されているものは版を重ねての刊行だと考えられる。挿絵には版権の所有を示す印が押されている。

(二) 作品としての評価

次に、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』が当時どのような評価を受けたのか確認していく。まずは版本の仕立てから刊行時の状況について考えてみたい。版本の表紙と裏表紙(図1)は、川村清雄の「黄海海戦」(図2)を木版画にしたもので、本を広げることにより一枚の画になる。川村は由緒ある幕臣の家系に生まれ、維新後も徳川家との繋がりが強かった人物である。同じく幕臣の家

系に生まれた木村は、弟の駿吉が川村の画業を支援する等、深い関係にあった⁽¹⁵⁾。

また、版本の題辞と跋文には六名の人物から寄せられた書画が使われており、川村純義の書、徳川家達の書、伊東祐亨の書、勝海舟の書、橋本雅邦の画が題辞、網陵孝の書が跋文となっている。海軍中将であった川村純義と伊東祐亨の書が掲載されていることから、この本に対する海軍の心象は決して悪いものではなかったはずだ。しかし、木村の書画帖を確認すると、版本に掲載された二人の他に、樺山資紀も書を寄せていたことがわかった。樺山が搭乘していた西京丸の奮戦は、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』でも取り上げられている。事情はわからないが、樺山の書のみが版本に掲載されていない。なお、雅邦の画には錨に止まる鷹の姿が描かれている。当時話題となった「霊鷹」の話に着想を得たものであろう。この話は、黄海海戦に際して高千穂艦のマストに鷹が止まったという内容で、瑞祥として絶賛された。

次に、刊行後の評判についても見ていきたい。『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』は、大阪朝日新聞、時事新報、読売新聞、毎日新聞、『國民之友』の書評欄で取り上げられ、好評を博した。各紙に掲載された批評の内容をいくつか紹介しておく。

(中略) 畫皆飛動して慘状人の意表に出で看るものをして悚然膽為に寒からしむるに足るものあり、此冊子一たび出で坊間に流布せる妄想的戦争畫は悉く顔色なきに至らむ乎茲に喜で廣く江湖に紹介す

(読売新聞、一八九六年三月十一日)

(中略) 之を見るもの初めて當時の實状を知り、感奮我れと我か海軍志想の啓發を促すべきなり

(毎日新聞、一八九六年三月十四日)

是れ海軍大尉木村浩吉君の著也、出版後直に一冊を余に寄贈せらる、微恙連句、黙して今日に到る、深く遺憾とす。始め君が日清海戦に關し筆を採らる、を聞き、望む處頗る渥かりし也。學殖君が如き、實歴君が如き、必ずや今回海戦に對し日本海軍將校として戰畧上戰術上觀察せし處を闡明し、彼我の功過、得失、勝敗の原由を指摘せらる、ならむと。而して今や單に、

『唯記憶すべき海戦に於て余の當時親ら見聞せる事實を書畫帖に上せ家に傳へんとせしに友人の勸に依り…童幼をして海軍思想を啓發せしむるを緊要とし』公にせられたり。是れ鶏を裂くに牛刀を以てせしもの、世の爲に惜まざるを得ん乎。叙事家として強記、快筆、同情の三點に於て著者は上乘の地に居るもの也、而して海戦を視察するに至適の旗艦に在り、軍職に在りし也。著者は形而下の戦況を精寫すると同時に形而上的の觀察眼を有せり。『下士卒の勇敢壯烈なる舉動は、何れも意想外に出で、余輩をして當初部下を見るに明なきを愧赧せしめたり。』言簡意長、優に當年の眞相を相見すへき也、敵弾中央水雷室を荒し部下多く惨死を遂ぐるの際、著書（ママ）の胸底に來往せし感想を記して曰く。『余は兩回有爲なる部下を失ふも一點の涙を眼中に浮かべざりし、何となれば當時に於る生死の差は、今日考ふる如き距離あらず遲速の差のみと思ひたれば也』と。何等の嚴肅なる感想ぞや、死生の環に起ち從容迫らず職分の爲に殉せんとするの精神を描きて餘蘊あるなし。卷末に到り、制海權の握否は、交戦國存亡の岐る、處たる所以を説き、海面を制するは實利的勝利たること縷陳し、最後に、『我國民たるもの宜しく世界の大事を達觀し、海上權力の弛張は實に國家の盛衰消長に最も大なる關係あるを察し、一時の海軍擴張に満足せず、朝野心を協せて、海軍の擴張を計り、遂に帝國をして大海軍力を有せしめ、四周の海上權を掌握し、優に國權國利を維持し、而して機に臨みては三國の教ゆる所を試み得るの餘力あらしむべきなり』と。是れ著者の持論にして、海國新興の道亦他岐あらむや。

（『國民之友』第二九〇號、民友社、一八九六年四月四日、三一—三二頁）

『國民之友』の批評は、木村の文才を賞賛した上で、本の内容が松島の出来事に絞られたことを惜んでいる。海戦の全貌を取り上げてほしかったというところであろう。下士卒の勇敢さが描写された箇所や、制海權の重要性を説いた木村の論説について、その内容を評価していることがわかる。当時、すでにロシアとの交戦が予感されていたことを踏まえれば、木村の作品が人々の関心を惹いたことは間違いない。

前節でも触れたが、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』は刊行から一年後に発禁処分を受けている。その理由は明らかでないが、挿絵の残酷描写が問題に

されたとするのが妥当である。当初は木村の意図が正しく理解されていたが、結果的に、挿絵の話題性が一人歩きする事態となったのかもしれない。ただ、発禁処分を受けたものの、黄海海戦の実見録として木村の文章と挿絵は重宝された。明治四十一年（一九〇八）年、遠洋航海の途中、松島は寄港した台湾の馬公で沈没してしまふ。海軍兵学校（三十五期）を卒業した少尉候補生を乗せての航海だったが、この事故で乗組員の過半数が殉職し、慰靈碑が馬公と佐世保に建立された。『軍艦松嶋之紀念』は除籍された松島の艦歴を讀める記念冊子だが、黄海海戦の部分には木村の文章が引用されている⁽¹⁶⁾。また、小笠原長生が『大海戦秘史 黄海海戦篇』で、木村本人から『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』を執筆の参考に贈られたと記しており、海戦の場面で引用している⁽¹⁷⁾。『大海戦秘史 黄海海戦篇』は昭和四（一九二九）年の刊行だが、同年、太田喜二郎も自身の著書の中で『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』の挿絵を取り上げている⁽¹⁸⁾。太田は、明治神宮の聖徳絵画館に奉納された「日清役黄海海戦」の作者である。発禁後も『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』が黄海海戦の資料として扱われた背景には、作者である木村が海戦の当事者であったことが少なからず影響しているだろう。しかしながら、木村の文章と挿絵は刊行当時から事実を活写した点で高評価を得ており、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』は海戦の実録として、具体的な戦争のイメージを人々に与えたのである。

二、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』と血の表現

（一）挿絵

『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』の本文は、海戦当日である明治二十七年（一八九四年）九月十七日の朝方、黄海の穏やかな情景描写から始まる。本来ならば文章と挿絵の内容を照らし合わせながら分析を進める必要があるが、文字数の関係上、本稿では十八枚の挿絵（第一回（第十八回））を中心に紹介したい。

挿絵の第一回には、甲板から月を見て祈る二人の水兵と、彼らの姿を見て涙する人物が描かれている。いずれもセーラー服を着用しているため、この三人は下士卒の位にある者たちである。また、涙する人物はサーベルを帯びており、照明を手に行っていることから、甲板を見回りに来た警吏（艦上警備担当者）だとわかる。説明文には「海戦ノ前夜水兵國家ノ為メ戦捷ヲ禱ル側ニ聴ク者ヲシテ其誠忠ニ感セシム」とある。「海戦前夜」の十六日は、夕刻から風が段々と強く

なり、小雨が降る中、稲妻が閃くという不穏な空模様だった⁽¹⁹⁾。挿絵にも月のまわりに暗澹たる叢雲が描かれている。しかし、一方では満天の星があり、すでに雨は止んでいるようだ。画面の陰影表現は同時代に活躍した小林清親の光線画を連想させる。水兵が「國家ノ為」に祈る「戦捷」とは、日清戦争における日本の勝利、しいては北洋艦隊と戦つての勝利を指している。この画に描かれているのは、北洋艦隊を見つけられずにいた海戦前夜に、二人の水兵が雨雲から顔を出した月に幸先を見て、戦果を祈っている様子である。木村は下士官以下の水兵たちもまた北洋艦隊との交戦を希っていたと伝えたかったのだろう。挿絵の第二図には、士官公室の様子が描かれており、説明文には「天際ニ煤烟ノ叢騰スルヲ見テ敵國ノ艦隊若クハ運送船隊トナシ士官室内祝盃ヲ舉ケテ會遇ヲ喜フ」とある。画面にある時計の針は十時三十分に達しておらず、第一遊撃隊の旗艦・吉野から「煤烟」発見の報告が入った直後の様子ということになる。士官公室のテーブルを囲む士官たちの雰囲気は和やかで、左側にいる人々は酒を交わしながら談笑し、右側にいる人々は囲碁に興じている（本文の内容から、対局している両者のうち、背が描かれている方が木村である。正面を向いている方は腕章の線が一本しかなく、大尉である木村であれば線が二本なければならない）。なお、第二図には書画帖の原画と異なる箇所がある。原画では時計の横に肖像画が掛けられているが、版本の挿絵では松の絵に差し替えられている。額の半分までしか描かれていないため、肖像画の全体像はわからない。しかし、その軍服姿は明治天皇の御真影を想像させる。御真影は明治五年頃から軍艦にも下賜されていた⁽²⁰⁾。版本で松の絵に差し替え、原画でも全体像を描かなかつた理由としては、やはり背景として描くことに憚りがあったのだろう。

挿絵の第三図には、黄海の水平線を遠景とした松島の艦体が描かれており、説明文には「敵艦及水雷艇見ユトノ遠距離信號ハ各艦歓聲ノ中ニ掲揚セラル」とある。吉野が掲げた遠距離信号は僚艦の歓声とともに迎えられたという意味だが、画面にある軍艦は吉野ではない。それというのも、この軍艦の艦橋には二人の士官が描かれており、その内の一人が望遠鏡を覗いている。本文を踏まえるに、この人物は木村であろう。木村の視線の先には、敵艦から昇る五縷の煤煙も描かれている。大櫓に翻る三枚の旗は、櫓頭から順に、中将旗、信号旗、軍艦旗である。中将旗は、中将の位にある司令官が搭乗した際に掲げられ、その軍艦が旗艦であることを示している⁽²¹⁾。次にある信号旗は、旗旋信号の「N」を

表している⁽²²⁾。しかし、旗の下に遠距離信号の赤い球体があるため⁽²³⁾、合わせて解釈すると「見ゆる船の名は如何」となる⁽²⁴⁾。おそらく、第一遊撃隊の報告に答えたものだろう。そして、斜桁にある軍艦旗は海軍に所属する艦船であることを示すもので、戦闘状態となれば戦闘旗として櫓頭にも掲げられた。

挿絵の第四図には、甲板上で喜び勇む下士卒たちの様子が描かれており、説明文には「敵艦隊見ユノ信号ハ忠勇ナル下士卒ヲシテ覚ヘズ快哉ヲ呼ハシム」とある。画面手前の二人は腕つ節の強さを語らんでいるのだろうか。その奥には、胡坐座を掻いて煙草を燻らせる者たちがいる。側にある小さな箱は煙草盆であろう。二つある内の一つは、傍らで取っ組み合っている二人によって引っくり返されている。その様子を周りも楽しそうに眺めており、下士卒たちの賑やかな会話が聞こえてくるような画である。また、画面左端には乗員の食糧となる牛も描かれている。

挿絵の第五図は、両艦隊の布陣図となっている。説明文には「我聯合艦隊敵弾雨下ノ間ニ立ツモ未タ有効距離ニ達セストナシ應セス急進敵ノ右翼ニ突進ス」とあり、画面上には敵艦隊右翼へと向かう聯合艦隊の姿が縦隊を横から見た形で描かれている。その周りには多数の水柱が立っており、すでに敵艦隊の砲撃が始まっていることがわかる。画面右の北洋艦隊は、凸型に並ぶ十隻が本隊、その下に描かれている四隻が別働隊である。この画は全体を俯瞰するような構図となっており、画面左下には戦地を示す地図もある。海戦の様子を把握しやすくするための配慮であろう。ただ、北洋艦隊の配置については正確でない。画面の聯合艦隊は艦首を右に向けて並んでいるため、大まかに言えば、画面左下から右上に向かって進航してきたことになる。両艦隊が接近する前、聯合艦隊の右舷側に北洋艦隊の本隊十隻、左舷側に別働隊四隻が見えていた。この画の配置であれば、北洋艦隊の別働隊は右舷側に位置していたことになり、本来の配置とは逆になっている。しかし、この画の主役は、単縦隊を取る聯合艦隊と後翼単梯隊を取る北洋艦隊の本隊である。この二つの陣形は、艦隊の勢力と戦術を含蓄しており、近代的な海戦を象徴するものでもあった⁽²⁵⁾。

挿絵の第六図（図3）には、敵弾によって全壊した七番軽砲と付近の惨状が描かれており、説明文には「十二珊ノ敵弾来ツテ七番軽砲砲座ニ命中シ砲身砲楯ヲ拂フ」とある。一人は下半身を失い、一人は血溜りを作つて倒れている。画面右端の人物は信号旗を握っているため、爆発に巻き込まれた信号兵であろう。



図3 第六図（版本、奈良県立図書情報館蔵）



図4 海軍軍令部編『廿七八年海戦史』上巻

片足がもげた苦痛に耐えるかのように両手で身体を支えている。なお、書画帖の原画だと足はもげておらず、吹き飛ばされた足首は他者のものとなっている。この図においては、木村が作画の参考にしたと思われる写真の存在を確認できた(図4)。該当の写真は、『廿七八年海戦史』に掲載されており、砲楯が逆向きに外れ落ちていたことを除けば、床に散らばる砲台の部品も画面の配置とほぼ一致している。木村は、『廿七八年海戦史』に掲載されたものと同じ写真を何枚か所有していた⁽²⁶⁾。そのため、この写真が木村の手元にあった可能性も少なくはない。また、木村の立場を考慮すれば、日清戦争の記録写真を見る機会は幾度となくあったと考えられる。ただし、『廿七八年海戦史』によると、この写真は「黄海海戦ノ際敵艦ニ破壊セラレタル西京丸ノ甲板」を記録したものである。松島の損害状況を記録したものではないが、木村の記憶を手繰るには十分な資料であったと思われる。斃れた兵士の姿は木村の記憶から描き出されたもので、写真に残せなかった戦闘の記録である。また、写真を参考にして軍艦の詳細を表すことで画面に迫真性を持たせようとする意図もあっただろう。

挿絵の第七図には、炎上する揚威と超勇が描かれており、説明文には「比叡赤城西京丸敵艦隊ノ中ニ奮戦ス本隊遊撃隊相待ツテ敵艦隊ヲ夾撃ス敵艦超勇沈没又揚威ハ沈没ノ避ク可ラサルヲ知り陸岸ニ向ツテ遁走ス」とある。この画に

描かれた場面は、『廿七八年海戦史』に掲載される「本隊戦闘航跡圖」の「第参圖」から「第四圖」の状況に当る。

挿絵の第八図(図5)には、中央水雷室の惨状が描かれている。説明文には「平遠ノ廿六珊彈我中央水雷室ヲ修羅場ニ化セシム」とある。壁に開いた穴からは炎が立ち上り、切断された電纜は機械ごと垂れ下がっている。画面右端には中央発射管員を指揮していた井手篤行少尉が描かれており、その周りには発射管員四名が無惨な姿となつて斃れている。大田直熊二等兵曹の報告書⁽²⁷⁾には、武内道治一等水兵、河野三代吉一等水兵、北村常吉二等水兵、徳永虎一四等水兵が死傷したとあり、その記述と照らし合わせることで、両足を失い這いつくばる人物が北村常吉、破れた腹から腸を露出している人物が河野三代吉、片腕が引き千切れ爪先から血を流す人物が武内道治だとわかる。武内は重傷を負ったものの、自らの足で治療所へと向かった。しかし、この三十分後、治療所内で別弾の爆発に巻き込まれて死亡した。また、砲弾に頭部を撃破された徳永虎一は衣服だけを残して肉片と化した。画面左端にある発射管の側には血まみれの事業服が描かれている。大田の報告によれば、天井や壁に附着した血肉の多くが徳永のものであったという。挿絵の画面にもべったりとした血痕があらわにちらに飛び散っている。この場面を描き出すために、木村は大田の報告書も参考にした可能性はあるだろう。

挿絵の第九図には、北洋艦隊が離散する場面が描かれており、説明文には、「本隊ハ孤立シタル定遠鎮遠ヲ窘シメ遊撃隊ハ敗艦ヲ追撃シ後経遠ヲ撃沈セシム致遠ハ遂ニ右舷ニ轉覆シ海中ニ没ス」とある。この画に描かれた場面は、『廿七八年海戦史』に掲載される「本隊戦闘航跡圖」の「第五圖」から「第六圖」の状況に当る。

挿絵の第十図(図6)には、下甲板左舷側の損害状況が描かれている。この時、鎮遠の主砲から発射された二発の三〇・五センチ砲弾が松島の左舷下甲板に命中しており、一弾は四番砲台(副砲)の砲身に当たって上方に軌道を転じ、上甲板を破つて不発のまま右舷側に飛び去っていった。もう一弾は四番砲台の砲楯に当たって破裂したため、附近に堆積されていた装薬を巻き込んで大爆発を起こした。説明文には「鎮遠ノ三十珊彈大ニ我下甲板左舷砲臺ヲ損害ス」とあり、屈曲した砲身が画面中央に横たわっている。これらの砲台のうち、原形を留めている方が二番砲台、破壊されている方が四番砲台である⁽²⁸⁾。周囲は煤けて薄



図5 第八図 (版本、奈良県立図書館蔵)



図6 第十図 (版本、奈良県立図書館蔵)



図7 第十一図 (版本、奈良県立図書館蔵)

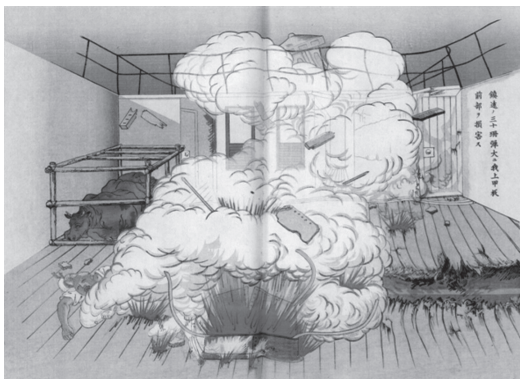


図8 第十二図 (版本、奈良県立図書館蔵)

暗く、天井は波を打つように変形している。舷側板に巨孔が開いているため、火煙は横へと流れている。また、砲台の残骸に混じって、床には兵士の五体が散乱しており、爆死の無惨さを隠さない。画面手前に長剣が落ちていたが、おそらく下甲板砲台を指揮していた志摩清直大尉が伊東満嘉記少尉のものであろう⁽²⁹⁾。原画と版本では遺体の様子が多少の違いがある。多くは手足の有無などの細かい点であるが、その中でも特に目に付いたところを挙げておく。版本では画面の中心に向かうほど煙で暗くなっており、砲台より手前に位置する遺体を照らし出すような表現となっている。一方、原画は版本ほど薄暗い印象にない。瓦礫から上る黒煙によって周囲の煤けた様子を表現しているが、砲台の残骸や兵士の遺体は等しく露にされている。その遺体の肌は黒っぽく変色しており、爆発の熱で焼け焦げてしまったことがわかる。また、原画では長剣の側に切断された頭部が二つ転がっているが、この二つの頭部は版本の画にない。

挿絵の第十一図(図7)には、煙に包まれた下甲板右舷側の損害状況が描かれている。説明文には、「鎮遠ノ三十珊弾大ニ我下甲板右舷砲臺ヲ損害ス」とあり、瓦礫の後ろから覗く構図で右舷砲台を捉えている。爆発の激しさを物語るように、天井は大きく歪み、鉄梁も屈曲して落下している。画面左奥には左舷砲台、画面右には敵弾が床を抉った痕が見える。湧き上がる黒煙は右に向かって濃く

なっており、画面外に隠れている場所も惨憺たる状況であることを想像させる。下甲板砲台を回復させた井上保大尉の報告によると、右舷は煙が立ち込めていて左舷よりも視界が悪い状態にあった⁽³⁰⁾。第十図に比べてこの画が暗澹としているのは、こうした事実を踏まえてのことであろう。また、煙の切れ間からは陰惨な室内の様子が覗き見える。瓦礫に混じって散乱する兵士の遺体は、切断された上半身や潰れ落ちた頭部など、身体の一部しか残っていない。

挿絵の第十二図(図8)には、上甲板の損害状況が描かれており、説明文には「鎮遠ノ三十珊弾大ニ我上甲板前部ヲ損害ス」とある。昇降口からは火煙が噴き上げ、上部を覆うように取り付けられていた柵も四方に吹き飛ばされている。沸き立つ白煙の中には一人の兵士が斃れており、まるで断末魔の叫びが張り付いたような表情をしている。錨鎖車は震動で飛び跳ねており、鉄柵は鉛細工のように変形している。蹲る牛も虚ろな目つきで弱々しい。第四図で見た戦闘前の様子と対比できる構成になっている。

挿絵の第十三図(図9)には、士官公室に集まった重傷者たちの様子が描かれており、説明文には「重傷患者僅ニ有毒瓦斯ノ裡ヨリ通レ治療ヲ受ケントシテ士官室ニ集ル」とある。画面の時計の針は敵弾が命中した三時三十分を指したまま止まっている⁽³¹⁾。時計と額の位置が第二図と入れ替わっているが、単純に



図9 第十三図 (版本、奈良県立図書館蔵)



図10 海軍省医務局編『日清戦役海軍衛生史』第四編

間違えたのだろう。画面右上には木村の姿が描かれており、重傷者の一人に土瓶の水を与えている。画面の重傷者は一様に肌が焼け爛れており、ある者は苦痛に顔を歪め、ある者は絶望に打ちひしがれている。なお、松島で重度の火傷を負った兵士たちの状態は『日清戦役海軍衛生史』に詳しい。この本には医学的な立場から戦傷者の姿を正確に記録した図が掲載されている(図10)。この図を見ても、第十三図は事実に基づいた画であることがわかる。実際の戦場を描き出そうとした木村の姿勢を改めて確認できよう。

挿絵の第十四図には、満艦飾の松島が描かれており、説明文には「廿七年十月二日 大元帥藤下黄海々戦ニ破損ヲ受ケタル諸艦ヲ天覽アラセラレ乗員士氣ヲメニ振フ一層」とある。この図も写真を参考にしており、第六図と同様に『廿七八年海戦史』に掲載されているものが元となっている。

挿絵の第十五図には、呉鎮守府病院の様子が描かれており、説明文には「明治廿八年三月三十日 皇后陛下呉海軍病院 行啓親シク従軍患者ヲ 慰撫セララル」とある。画面手前には軍服を着用した人物は、呉鎮守府病院の院長を務める海軍軍医大監・三田村忠國であろう。黄海海戦の戦傷者は、まず、佐世保鎮守府病院で手当てされ、その後、搬送に耐え得る者のみ呉鎮守府病院に移された⁽³²⁾。松島の乗員では、「上肢貫通創」を負った一名が呉で治療を受けている。

なお、明治天皇が宇品や呉を訪問したのは、黄海海戦の四日前(九月十三日)に大本営が広島へと移設されていたためである。
挿絵の第十六図には、説明文に「勲章授與式」とある通り、その様子が描かれている。

挿絵の第十七図には、靖国神社が描かれており、説明文には「廿八年十二月十七日 天皇陛下靖国神社ノ臨時大祭ニ 臨幸 親カラ戦死者ノ靈ヲ拜シ給フ」とある。書画帖の原画と比べると、国旗や官司、騎兵などが描き加えられており、やや賑やかな印象になっている。

挿絵の第十八図では、酒を組み交す三人の下士卒たちを中心に、画面左上には皇居、画面右上には凱旋を祝う街の様子が描かれている。木村は、この挿絵に漢詩を添えて作品の最後を締めくくっている。

版本の挿絵は以上の十八枚となるが、書画帖には全十九図の原画が収められている。この版本の挿絵に使用されなかった一枚には、木村が日清戦争の功によって授かった三つの勲章が描かれている⁽³³⁾。『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』の本文に直接関係するものではないため、刊行の際に省いたことは想像に難くない。木村には海戦の記憶を書画帖にまとめて家に伝える目的があった。そのため、自身の功績も絵に残したのだろう。また、第十九図に使われている紙の大きさは、他のものに比べて半分程しかなく、やや控え目な印象を受ける。ちなみに、画面にある勲章は旭日章、金鷄勲章、瑞宝章である。

(二) 同時代の戦争報道画

同時代に戦争の様子を伝えていた報道画についても言及しておく。当時の戦争報道画における表現を知ること、木村の作品の特色を確認することにも繋がるはずだ。しかしながら、日清戦争を題材にした画は多種多様に存在し、その全てを網羅することは難しい。そのため、本稿では黄海海戦を題材にした錦絵と戦争画帖に焦点を絞った。これらは、当時の大衆にとって身近な存在であり、日清戦争がどのように描かれ、どのようなイメージを作り出していたのかを考察するに適している。

日清戦争は、それまで人気低迷していた錦絵に盛況をもたらした。当時、戦闘場面を撮影できるほどに写真技術は発達しておらず、錦絵は写真に不足した躍動感を補うことで、その需要を高めた⁽³⁴⁾。錦絵や戦争画帖は報道媒体として

新聞の補助的な役割を果たしており、その速報性が評価され、列強国にも流通していた⁽³⁵⁾。しかし、画工の多くは従軍せずに作品を描いていたため、画面の情報には誤報や誤信も含まれている⁽³⁶⁾。さらには、海外の視線や国内の規制を意識した内容であったことも考慮しなければならない。

黄海海戦をはじめとして、海戦を描いた錦絵の主役は軍艦であった。陸戦とは異なり、白兵戦となることがなかったため、基本的に兵員同士の戦闘は描かれていない。画面上には、睨み合う両艦隊の姿や、清国艦隊の軍艦が撃沈される場面が多く取り上げられた(図11)。中には、爆風に散らされた清兵の姿まで描いたものもあるが、木村の画のような生々しさはない(図12)。また、近代兵器として、軍艦に対する人々の関心も高かった。北洋艦隊は定遠や鎮遠に代表される強大な甲鉄艦を有していたが、錦絵の画面からは聯合艦隊の軍艦の方が強靱な装甲を纏っていたような印象を受ける。実際、聯合艦隊は艦齢の新しい軍艦を揃えていたが、その点を強調しているようにも見える。

なお、有名な作品としては小林清親の「於黄海我軍大捷 第一圖」が挙げられる(図13)。清親は日清戦争の錦絵人気之恩恵を受けた絵師の一人であり、得意の陰影表現で幻想的ともいえる海戦場面を描き出した。「於黄海我軍大捷 第一圖」においても、煙った空に飛び交う砲弾が、まるで花火のような美しさで描かれている。

人物が取り上げられた例としては、安達吟光の「樺山軍令部長西京丸を以て敵艦に當る」を挙げておく(図14)。この作品は、黄海海戦における西京丸の奮戦を題材にしたもので、画面中央で剣を振りかざしながら指揮を取っている人物が樺山資紀である。海軍の指揮に刀は不要であったはずが、将校に武士のイメージを重ね合わせたのか、日清戦争を描いた錦絵ではこういった表現が多々見られる⁽³⁷⁾。しかし、部分的に合戦調の表現を用いることで、画面を劇的に演出したとも考えられる。また、黄海海戦は日本が始めて体験する本格的な海戦であったため、戦闘中の艦内の様子など、絵師にとっても不明な点が多かったのかも知れない。

木村の作品と比較するためには、忠勇美談を題材にした作品についても述べておく必要がある。日清戦争では、「喇叭卒の最期」や原田重吉一等兵の平壤一番乗りなど、忠勇美談が数多く生まれ、新聞をはじめとする報道媒体に競って取り上げられた。黄海海戦では「勇敢なる水兵」(図15)や、赤城艦長・坂元八

郎少佐の戦死(図16)が逸話として伝わっている。坂元は士官だが、忠勇美談として取り上げられた人物の殆どは無名の兵士であった。該当する錦絵をみると、物語を伝える画として綺麗にまとめられているものが多く、兵士の勇敢さや戦闘の激しさを表すために血生臭さを含めて描こうとする画は見当たらなかった。また合戦調の表現が残っている中、日清戦争以前にあった、死に様をドラマチックに演出するための流血も描かれなくなっている。

ただし、清兵を描いた錦絵の中には血生臭い表現が用いられているもの確認できる。小国政の「暴行清兵ヲ斬首スル圖」(図17)には、警護の巡查に乱暴した清兵を斬首刑に処した出来事が描かれており、戦闘場面を描いたものではないが、血溜まりに転がる首の描き方に生々しさがある。人物のポーズは従来の演劇的な描き方になっているものの、斬首の描写に大袈裟な演出はなく、娯楽性を差し引いて現場の様子を表そうとしているところに木村の血の表現と共通するものが感じられる。なお、清兵は赤十字病院を襲う残酷な国風をもっている」と詞書にあり、清国が非道であると印象付けたい意図も見受けられる。敵兵を懲罰する画であったため、現実味のある残酷描写であつても検閲を通つたのだろう。

次に、冊子形態で刊行された戦争画帖についても触れておきたい。当時、好評を博した作品の一つに、日本画家である久保田米遷・米斎の父子が刊行した『日清戦闘畫報』がある。久保田父子は『国民新聞』の特派員として陸軍に従軍しており、『日清戦闘畫報』はその取材に基づいて制作された。海戦を描いたものは少ないが、黄海海戦の画(図18)では、松島の砲撃により出火する定遠が描かれている。なお、この画帖には、赤十字の野戦病院を描いた画もあり、題材から判断するに、日本が近代国家であることを印象付ける目的もあつたと考えられる。英語の説明文が付けられた画も数点あるため、海外の視線を意識していたことは確かだろう。また、この画帖でも忠勇美談は取り上げられており、「喇叭卒の最期」を描いた画が収められている。さらに、戦争画帖の例として、岩崎元治郎による『黄海海戦 軍艦御用』についても紹介したい。この画帖は、両艦隊の布陣を詳細に解説したもので、英語と日本語の文章が記されている⁽³⁸⁾。黄海海戦は世界史上で初めての近代的な海戦として戦術に対する関心を海外からも集めていた⁽³⁹⁾。『黄海海戦 軍艦御用』は、そうした需要を反映した作品といえる。

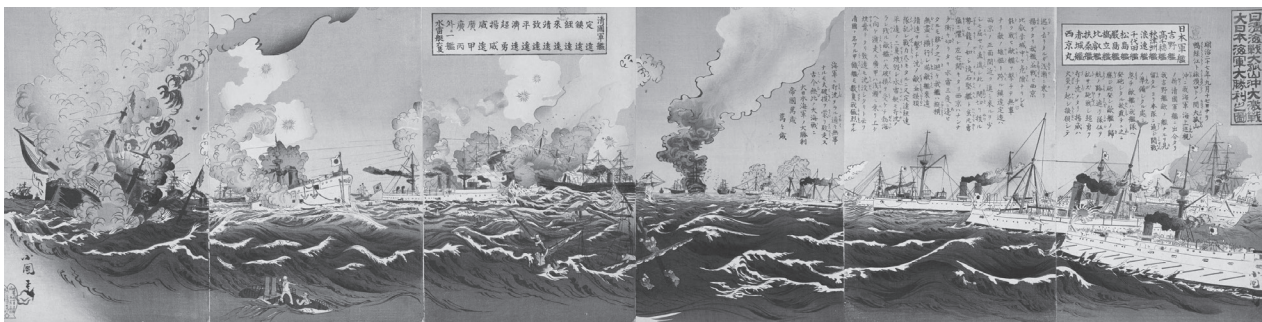


図 11 小国政「日清海戦大孤山沖大激戦大日本海軍大勝利之圖」(1894) (大英図書館蔵)



図 12 小国政「九月廿日號外 海洋島附近激戦」(1894)
 (国立国会図書館デジタルコレクション)

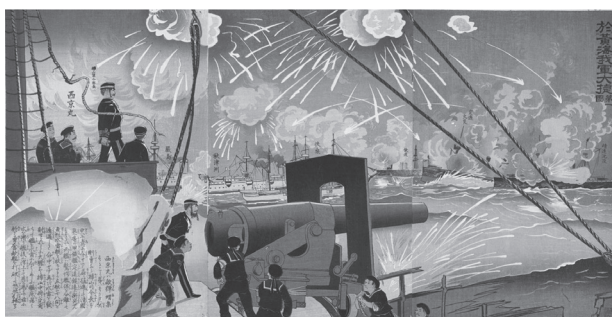


図 13 小林清親「於黄海我軍大捷 第一圖」(1894)
 (大英図書館蔵)



図 14 安達吟光「樺山軍令部長西京丸を以て敵艦に當る」(1894)
 (国立国会図書館デジタルコレクション)



図 15 小林清親「黄海之戦我松島之水兵臨死間敵艦之存否」(1895)
 (大英図書館蔵)

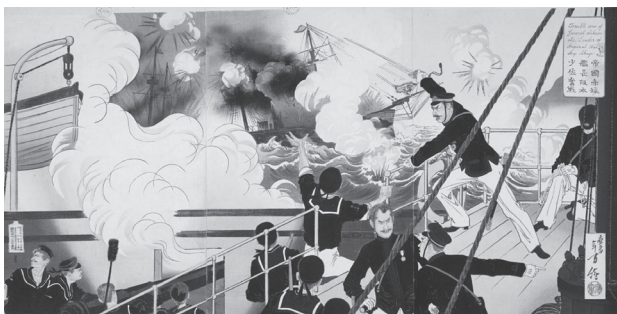


図 16 水野年方「帝國赤城艦長阪本少佐奮戦」(1894)
 (大英図書館蔵)

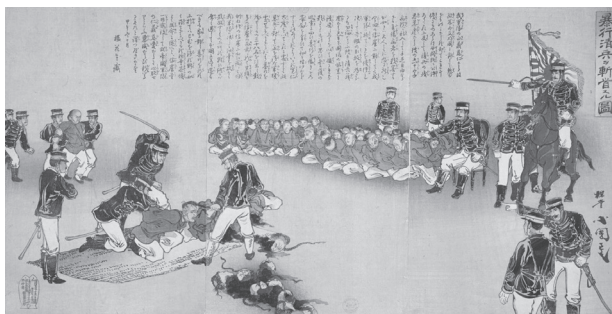


図 17 小国政の「暴行清兵ヲ斬首スル圖」(1894)
 (大英図書館蔵)

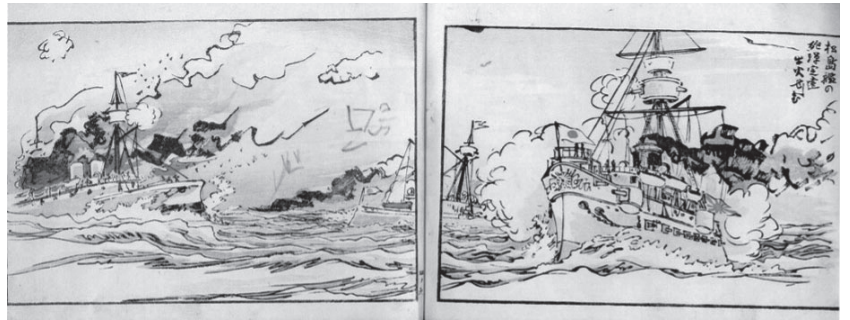


図 18 久保田米僊・久保田米斎・久保田金仙『日清戦闘畫報』第四篇

戦時下に刊行された戦争報道画の傾向を見ていくと、戦闘による損害状況を表す絵は稀少であったことがわかる。特に、錦絵は民衆の需要を重視する傾向にあり、刊行にあたって検閲を受ける。士気を下げると判断される描写は避けられていてもおかしくはない。また、海戦だけでなく陸戦にも視野を広げると、敵将との一騎打ちを思わせる画や、敵兵の首を刎ね飛ばす画など、従来の劇的な表現をもって戦闘を描く錦絵の数が増える。見方によっては戦争を娯楽として捉えている印象を受けるかもしれない。戦闘場面を描いた画であっても「暴行清兵ヲ斬首スル圖」のように敵国を蔑視しての残酷表現だとする見解もあるだろう。もちろん戦時中においてその要素は否定できないものではない。ただ、錦絵という媒体がこれまでで発展させてきた表現をもって日清戦争を描こうとしているという点は考慮すべきである。一方、戦争画帖の例をみてもわかる通り、海外に向けて情報発信するねらいをもった戦争報道画も存在する。列強に認められるよう、近代的で洗練されたイメージを普及する仕上がりとなっており、当然ながら自国の損害を生々しく描いたものはない。こうした時代の状況を踏まえると、自国の兵士の死に様を含め、戦場の現実を忠実に描いた木村の作品は、近代日本の戦争報道画を考える上でも貴重な位置づけにある。

おわりに

日清戦争の海戦を描いた作品には、軍艦や布陣図によって近代戦争のイメージを表したものが多い。当時の人々は、これらの絵から視覚的に情報を得て、旧来にあった戦争のイメージを改めていった。『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状

況』は近代的な海戦による死傷者の姿も示しており、その点においても類をみない作品である。木村は人の目に曝されることのなかった場面を詳細に描き出し、刊行という形で公に発表した。実時間ではないものの、軍人による報道画として前例のない作品を生み出した。

『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』は文章と挿絵によって構成されており、本文の内容を支えるために画の力を借りている。木村は制海権の重要性を説き、海軍の拡張を主張している。その持論を展開するためにも、兵士の勇敢さを描写し、彼らの士気を讃えた。さらなる強国との戦争を想定するならば、兵士の質ではなく兵器の量に不足があると木村は考えていたからである。残酷な挿絵の描写は人体の脆さを教えてくれる。勇敢に戦った兵士の死に様であっても、事実として、戦場では一様に無惨な姿となった。木村は自身が見聞した光景を画にすることで、近代戦争がどういったものかを示そうとした。かつての西南戦争とは異なり、日清戦争の戦場は日常から遠く離れた場所にあった。だからこそ、木村は人々に戦場の現実を見せなければならなかった。挿絵だけが広まれば厭戦の気を起こさせるかもしれない。それほどに木村の描写は徹底している。海戦では一発の砲弾が一瞬にして多数の命を奪う。その事実を突きつけた上で、木村は新たな軍備の必要性について理解を求めている。海上戦力の拡大を願う木村の思いは文章にまとめられており、その内容を支える挿絵は冷静な目をもって近代兵器の威力を伝えようとしている。そのため、血みどろの惨状も包み隠さず描写された。『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』は、後世の目で見ると異質な作品に見えるが、当時は少なくとも一度受け入れられている。海軍関係者にも刊行を認められていたという事実を踏まえれば、挿絵の残酷な表現も木村の意図を考慮して理解されていたのだろう⁽⁴⁰⁾。時代背景が後押ししていたこともある。

戦争報道画が伝える戦場のイメージは、日清戦争を通して「合戦」から「戦争」へと変化していった。錦絵は戦況を伝える媒体となって需要を得たが、同時に忠勇美談の物語も題材にした。当時の日本は帝国主義の近代国家として駆け出しの頃にあり、戦争報道画からも過渡期の様相が見て取れる。『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』は当事者の体験記録であり、その挿絵には「戦争」を伝えるための血の表現がある。戦場のイメージが更新されつつある時代であったからこそ、世に出された作品であるともいえよう。

ただし、本研究においては同時代の作品との比較という点でまだ課題が残る。戦争報道画以外の作品群も分析し、日清戦争の描かれ方を広い視野をもって考えていく必要がある。今後の研究に繋げていきたい。

注

- (1) 松島が北洋艦隊（鎮遠）からの砲撃により大打撃を受けた際、その砲撃で瀕死の重傷を負った三浦虎次郎三等水兵が、巡検中の向山愼吉副長に対し、「まだ沈まずや定遠は」と訊いたとされるエピソードをもとに、「勇敢なる水兵」という軍歌が作られた。
- (2) 原田敬一「戦争を伝えた人びと——日清戦争と錦絵をめぐる——」佛教大文学部編『佛教大学文学部論集』第八四号、佛教大学文学部、二〇〇〇年三月
- (3) 大谷正「日清戦争報道とグラフィック・メディア——従軍した記者・画工・写真師を中心に——」メディア史研究会編『メディア史研究』第二一号、ゆまに書房、二〇〇六年二月
- (4) 丹尾安典・河田明久『イメージのなかの戦争——日清・日露から冷戦まで——』岩波近代日本の美術1、岩波書店、一九九六年
- (5) 丹尾安典編『記憶と歴史——日本における過去の視覚化をめぐる——』早稲田大学會津八一記念博物館、二〇〇七年
- (6) 市村茉莉「日清戦争錦絵における戦争表現とその受容」関西大学大学院東アジア文化研究科編『東アジア文化研究科院生論集』第二号、関西大学大学院東アジア文化研究科、二〇一三年二月
- (7) 市村茉莉「日清戦争期における戦争表象——印刷媒体に表現されたイメージについて——」関西大学大学院東アジア文化研究科博士論文、二〇一六年三月
- (8) 土居良三『軍艦奉行木村撰津守 近代海軍誕生の陰の立役者』中央公論社、一九九四年
- (9) 版本には記載されていないが、書画帖の原文には署名とともに日付が記されている。
- (10) 『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』の版權登録証の他、木村が明治二十九

- (9) (一八九〇年に出版した『海軍圖説』の版權登録証も収められている。版本の刊記には「摹画 小林檉湖」と記されており、『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』を刊行するに当たって、書画帖にあった木村の画を小林が木版画用に写したことがわかる。この小林という人物については、確認できる記録の数も少なく、まだ不明な点が多い。しかし、経歴としては、松本楓湖の門人であったことがわかっている（添田達嶺『平古と楓湖』睦月社、一九五五年、一四三頁）。また、明治十四年三月一日から六月三十日まで開催されていた第二回内閣勸業博覧会の記録に「小林檉湖」という出品者名を見つけてきたことができた（東京国立文化財研究所編『内閣勸業博覧会美術品目録』中央公論美術出版、一九九六年、二二頁）。小林檉湖と同一人物の可能性がある。
- (10) なお、本稿の調査段階では書画帖にある原画を木村の作と断定するまでに至っていないが、版本の刊記に「摹画」をした小林の名があるため、もし原画が木村以外の作であるならば、その名も刊記に記載したのではないかと考える。本稿では、緒言にある「余ノ當時親ヲ見聞セル事實ヲ書畫帖ニ上セ」という言葉を前提に論考を進めた。
- (11) 『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』が刊行された時にも大本営は残っていた（明治二十九年四月一日に解散）。
- (12) 原田敬一『日清戦争』戦争の日本史19、吉川弘文館、二〇〇八年、一八〇頁
- (13) 『日清戦争 黄海海戦（錦絵）』ドキュメント 黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況、『歴史読本』九月号、新人物往来社、二〇〇七年
- (14) なお、発禁処分となった正確な年月日と理由については自身でも官報を調べているがまだ該当の告示が見つからない。
- (15) 矢野貫一編『近代戦争文学事典』第十輯、和泉書院、二〇〇八年、三二二頁
- (16) 前掲の『近代戦争文学事典』が全七図の版本を取り上げており、七枚の挿絵について解説している。全十六図の版本については情報を得られていないが、最も挿絵の枚数が少ない全七図の版本に六枚とも揃っているため、欠けていると判断した。
- (17) 高階秀爾「川村清雄についての二、三の考察」、高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』中央公論美術出版、一九九四年、三三三頁
- (18) 『海軍』編輯局編『軍艦松嶋之紀念』画報社支店、一九二二年、三二—三九

- 頁
- (17) 小笠原長生『大海戦秘史 黄海海戦篇』實業之日本社、一九二九年、二〇三—二〇五頁、二一九—二三八頁
- 巻頭に「當時の錦繪」として『黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』の第一図と第四図が掲載されている。
- (18) 太田喜二郎『黄海々戦を描きて』女星堂寫眞製版所、一九二九年、四三頁
- (19) 海軍軍令部編『廿七八年海戦史』上巻、春陽堂、一九〇五年、一六三頁
- (20) 多木浩二『天皇の肖像』岩波書店、一九八八年、一二五頁
- (21) 海軍省編『海軍旗章條例』海軍省、一八八九年、三一—四頁
- (22) 第七条にて「將旗ハ司令長官司令官タル將官指揮權ヲ帶ヒ乘艦シタルトキ大將ハ大橋頂ニ之ヲ掲ケ中將ニ在テハ前橋頂ニ之ヲ掲ケ少將ニ在テハ後橋頂ニ之ヲ掲ケ（中略）中將ニ橋以下ノ艦ニ乘艦シタルトキハ將旗風上ノ上隅ニ紅球一個ヲ附シ（後略）」と定められている。当時は將旗の意匠に違いがなかったため、掲げる場所、もしくは旗に赤丸を付け足して区別した。松島には大橋しかなかったため、条例の通り、第三図でも旗の風上に赤丸が一個付けられている。
- (23) 通信省編『万国船舶信号書』第一編 増補版、日本海員救済会、一九二四年
- 前掲書(22) 四七—五一頁
- 通常、遠距離信号は形象（上尖錐形、球形、下尖錐形、跛形）を用いて字母を表す。球形は遠距離信号の標であるため、各信号中、少なくとも一個は掲げることになっている。
- (24) 前掲書(22) 四七—五一頁
- 遠距離信号において、旗の次に球形が掲げられた場合、座礁により救援を求め信号となる。しかし、「N」（遠距離信号の便宜上、数字順に配置すると二三）を特定遠距離信号として解釈すれば、「見ゆる船の名は如何」と読み取る（二四）とができる。ここでは、後者の意味を示しているものと捉えた。
- (25) 北洋艦隊は、定遠と鎮遠を中堅とする後翼単梯陣を取り、砲撃しつつ衝角で攻撃するという勝利に堅い戦術を主眼としている。当時の清国は、眠れる獅子と称されていたように、侮ることのできなない強大な国だった。その海軍には「東洋一の堅艦」と呼ばれた定遠と鎮遠があり、この同型艦二隻
- の存在は日本にとって長年の脅威となっていた。対する聯合艦隊は、単縦陣を採用し、舷側の速射砲を用いて敵艦隊を翼端から撃破していく作戦にある。理想としては、敵艦隊を取り囲んで渦巻き状に周回し、外から内へと順に砲撃を浴びせて潰していく。つまり、聯合艦隊は衝角戦法を取り入れず、砲撃戦に主眼を置いていた。この単縦陣による戦術は、イギリス海軍のイングルス大佐が提案・指導したもので、海戦直前の対抗運動や机上検討を経て採用されている（前掲書(11)、一三三頁）。また、聯合艦隊の勢力は、甲鉄艦の数が一隻（北洋艦隊は六隻）、排水量の総計が約四万トン（北洋艦隊は約三万五千トン）、平均速度が約十六ノット（北洋艦隊は約十四ノット）、二十一センチ以上の重砲が十一門（北洋艦隊は二十三門）、軽砲（機砲を含む）が二百五十一門（北洋艦隊は二百四、あるいは二百八門）となっており、北洋艦隊の勢力と比較すると、装甲や大口径砲の数では劣っているものの、速度と中口径以下の砲の数では優れていた。さらに、中口径以下の砲のうち、新式の速射砲は百八十門に上る。聯合艦隊の軍艦が機動力の高さと速射砲の数で優れていたことは、海戦の勝利を得る一因となった。
- (26) 横浜開港資料館蔵の木村浩吉資料の中に複数点の記録写真を確認できる。
- (27) 「黄海々戦ニ於ケル松嶋水雷室及水雷部員」（木村浩吉資料、横浜開港資料館蔵）
- (28) 前掲書(27) 報告文の後に砲台の位置を示す挿図が描かれている。
- (29) 志摩と伊東が下甲板砲台の指揮を取っていたとする本文の件により推測した。
- (30) 前掲書(19) 二二—二四頁、「井上松島砲術長勤務日誌概要」
- (31) 前掲書(19) 「聯合艦隊司令長官海軍中将伊東祐亨報告」一三五頁
- (32) 伊東の報告書によると敵弾は午後三時二十六分に着弾しているが、本文において木村は午後三時三十分頃としている。
- (33) 海軍省医務局編『日清戦役海軍衛生史』第四編、海軍省医務局、一九八八年
- (34) 「木村芥舟・木村浩吉資料目録」横浜開港資料館編『木村芥舟とその資料旧幕臣の記録』横浜開港資料普及協会、一九八八年、九八—一四四頁
- (35) 前掲書(3)
- クリストフ・マルケ「記録と記憶—日清戦争画像のなかの歴史—」丹尾安典編『記憶と歴史—日本における過去の視覚化をめぐる』早稲田大学

- (36) 會津八一記念博物館、二〇〇七年、二三—四一頁
- (37) 前掲書(2)、一—一五頁
- (38) 前掲書(2)
- (39) 岩崎元治郎『黄海海戦 軍艦御用』東台書院、一八九六年
国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/pid/773635>) を参照
(二〇二三年七月二日)。
- (40) 前掲書(1)、一三七—一四〇頁
- 木村の経歴をみたところ、発禁処分の影響によって立場がわるくなることもなかったと思われる。
- 参考文献**
- 1 木村浩吉『黄海々々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』内田老鶴圃、一八九六年(奈良県立図書館蔵)
 - 2 木村浩吉『黄海々々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況』(木村浩吉資料、横浜開港資料館蔵)
 - 3 木村浩吉『海軍圖説』大日本図書株式会社、一八九六年
 - 4 横浜開港資料館編『木村芥舟とその資料 旧幕臣の記録』横浜開港資料普及協会、一九八八年
 - 5 藤原正人編『國民之友』第一八卷(Ⅱ)、明治文獻資料刊行会、一九八四年
 - 6 久保田米僊・久保田米斎『日清戦闘畫報』第二篇、大倉書店、一八九四年
 - 7 久保田米僊・久保田米斎・久保田金仙『日清戦闘畫報』第四篇、第六編、大倉書店、一八九四—一八九五年
 - 8 岩崎元治郎『黄海海戦 軍艦御用』東台書院、一八九六年
 - 9 『海軍』編輯局編『軍艦松嶋之紀念』画報社支店、一九二二年
 - 10 小笠原長生『大海戦秘史 黄海海戦篇』實業之日本社、一九二九年
 - 11 太田喜二郎『黄海々々戦を描きて』女屋堂寫眞製版所、一九二九年
 - 12 海軍軍令部編『廿七八年海戦史』上巻、春陽堂、一九〇五年
 - 13 海軍省医務局編『日清戦役海軍衛生史』第四編、海軍省医務局、一八九八年
 - 14 海軍省編『海軍下士以下服制』海軍省、出版年不明
 - 15 海軍省編『海軍武官服制』海軍省、一八七三年十一月
 - 16 海軍省編『海軍旗章條例』海軍省、一八八九年十一月
 - 17 海軍省編『万国船舶信号書』第二版、海軍省、一八七六年
 - 18 通信省編『万国船舶信号書』第一編 増補版、日本海員救済会、一九二四年
 - 19 吉田虎三郎編『万国船舶信号法問答』福井春芳堂、一九〇一年
 - 20 『黄海々々戦ニ於ケル松嶋水雷室及水雷部員』(木村浩吉資料、横浜開港資料館蔵)
 - 21 鈴木純一郎『日清戦争軍人名譽忠死列傳』尚古堂・弘文館、一八九四年
 - 22 原田敬一『日清戦争』戦争の日本史19、吉川弘文館、二〇〇八年
 - 23 原田敬一『戦争を伝えた人びと—日清戦争と錦絵をめぐる—』佛敎大文学部編『佛敎大文学部論集』第八四号、佛敎大文学部、二〇〇〇年三月
 - 24 大谷正『日清戦争報道とグラフィック・メディア—従軍した記者・画工・写真師を中心に—』メディア史研究会編『メディア史研究』第二号、ゆまに書房、二〇〇六年二月
 - 25 丹尾安典・河田明久『イメーシのなかの戦争—日清・日露から冷戦まで—』岩波近代日本の美術1、岩波書店、一九九六年
 - 26 丹尾安典編『記憶と歴史—日本における過去の視覚化をめぐる—』早稲田大学會津八一記念博物館、二〇〇七年
 - 27 市村茉莉『日清戦争錦絵における戦争表現とその受容』関西大学大学院東アジア文化研究科編『東アジア文化研究科院生論集』第二号、関西大学大学院東アジア文化研究科、二〇一三年二月
 - 28 市村茉莉『日清戦争期における戦争表象—印刷媒体に表現されたイメージについて—』関西大学大学院東アジア文化研究科博士論文、二〇一六年三月
 - 29 藤村道生『日清戦争—東アジア近代史の転換点—』岩波書店、二〇〇七年(初版 一九七三年)
 - 30 土居良三『軍艦奉行木村撰津守 近代海軍誕生の陰の立役者』中央公論社、一九九四年
 - 31 高階秀爾『川村清雄についての二、三の考察』高階秀爾・三輪英夫編『川村清雄研究』中央公論美術出版、一九九四年
 - 32 東京国立文化財研究所編『内国勸業博覧会美術品目録』中央公論美術出版、

- 一九九六年
- 33 添田達嶺『半古と楓湖』陸月社、一九五五年
- 34 多木浩二『天皇の肖像』岩波書店、一九八八年
- 35 篠原宏『日本海軍お雇い外国人―幕末から日露戦争まで―』中公新書、一九八八年
- 36 矢野貫一編『近代戦争文学事典』第十輯、和泉書院、二〇〇八年
- 37 「日清戦争 黄海海戦（錦絵）」ドキュメント 黄海々戦ニ於ケル松島艦内ノ状況」
- 38 『歴史読本』九月号、新人物往来社、二〇〇七年

その他、横浜開港資料館が所蔵している木村浩吉資料から何点かを参考にさせていただいた。

図版の錦絵については、「アジア歴史資料センター・大英図書館共同インターネット特別展 描かれた日清戦争〜錦絵・年画と公文書〜」(<https://www.jacar.go.jp/jacarbi/sgwar-j/>)のギャラリーページと国立国会図書館デジタルコレクション(<https://dl.ndl.go.jp/>)から引用した。

資料1 挿絵一覧 (版本: 奈良県立図書館蔵、書画帖: 横浜開港資料館蔵)

	版本 (木版画)	書画帖 (原画)		版本 (木版画)	書画帖 (原画)
第一図 (海戦前)	 戦捷を祈る水兵と二人の姿に涙する警吏		第十図 (海戦)	 松島 (下甲板左舷側) の損害状況	
第二図 (海戦前)	 士官公室の様子		第十一図 (海戦)	 松島 (下甲板砲台) の損害状況	
第三図 (海戦前)	 北洋艦隊との遭遇		第十二図 (海戦)	 松島 (上甲板) の損害状況	
第四図 (海戦前)	 喜び勇む下士卒たち		第十三図 (海戦)	 士官公室に集まった重傷者たちの様子	
第五図 (海戦)	 両艦隊の布陣図		第十四図 (海戦後)	 満艦飾の松島	
第六図 (海戦)	 松島 (七番軽砲と付近) の損害状況		第十五図 (海戦後)	 呉鎮守府病院	
第七図 (海戦)	 戦闘航跡図 (炎上する敵艦)		第十六図 (海戦後)	 勲章授與式	
第八図 (海戦)	 松島 (中央水雷室) の損害状況		第十七図 (海戦後)	 靖国神社	
第九図 (海戦)	 戦闘航跡図 (離散する北洋艦隊)		第十八図 (海戦後)	 酒を組み交す下士卒	